北から南から

防災教育を担うことができる教員になるために
～チームつなくる15年の成果～

北海道釧路市チームつなくる 顧問
北海道教育大学釧路校 教授　境 智洋

1 はじめに

「国後島があるから羅臼には津波は来ないと信じている子どもたちがいる。」と小学校の校長先生から研究室に相談がありました。卒業論文で浜中町の津波防災に取り組んでいた学生と釧路地方気象台が共同で、2010年から羅臼町立羅臼小学校６年生で、防災授業に取り組み始めます。翌年、東日本大震災により防災教育の重要性が高まります。しかし、教育現場は「防災授業ができる教員がいない」、「防災授業の教材がない」など混乱しました。防災教育を担当できる教員の養成に期待がかかってきたのもこの頃からです。学生が実施していた津波防災授業は、津波が来る様子を視覚的に伝える津波実験装置を用い、津波と波の違いを目で見て体験して教える画期的な授業でした。口コミで「防災授業をやっている研究室」と学校から出前授業の要請が増えていきます。2011年からは、学生が主体となって取り組む形ができるようになり、学生の防災教育グループを、津波実験装置「つなくる」から取り、「チームつなくる」を用いるようになりました。

2 チームつなくるの活動

「チームつなくる」は、北海道教育大学釧路校・地域学校教育実践専攻・学校教育実践分野・授業開発研究室・境コースのゼミ生のうち学部３・４年生が主体となっています。学生が「チームつなくる」として釧路市内をはじめ、東北海道地域で毎年10～15校を回って防災出前授業を行っています。「学校で防災授業を行うことは、子どもたち自身が自らの命を守ることができ、正しい防災意識を持つ『ひと』に変えることができる。そして子どもたちが学んだことで芽生えた防災意識は、地域を変えていくことができる。」この方針を学部４年生が下の学年に伝え、「チームつなくる」として代々引き継がれているのです。つなくるの活動は、組み立て式の津波実験装置（全長7.5m、幅0.9m、高さ0.5m）を学校に運び、小学校の中、高学年向けに「津波とはどのような波か」、「津波から身を守るにはどうすべきか」を課題として授業を行っています（写真１）。また、低学年には、場面を想定した３人の中であなたはどの人になりますか？ という問いかけながら行う「防災寸劇」をしています。これらは、毎年、学生が変わることにリニューアルし、地域や訪問校に応じて内容を変えています（写真２）。また、釧路市の防災行事でも実施し、市民に向けた防災クイズ寸劇を行いました（写真３）。2022年には学生がNHK釧路放送局と共同で「津波から身を守る」ビデオ教材の作成を行い普及を図っています（写真４）。さらに、訪問校の児童に配布する地震津波防災パンフレットの作成も行い、現在第４版までリニューアルしています。

写真１　津波実験装置を用いた授業

写真２　小学校で津波寸劇

写真３　釧路市防災ワンデーで津波寸劇

写真４　NHKと共同でビデオ教材作成

3 15年の成果

羅臼町では２校ある小学校で津波防災授業を15年継続して行っています。アンケートから「国後島があっても、津波は来る」と答える児童、家庭が増えてきました。また、釧路市の小学校の防災授業の一躍を担うのが「チームつなくる」になっています。現在は、遠くは苫小牧市から授業の要請があるなど、社会教育施設、自治体の防災行事、幼稚園などから依頼を受けるようになりました。また、15年で研究室から60名が巣立っています。各地域で教員として防災教育に寄与していることが伺えます。津波実験装置を大学から持ち出し、自ら防災授業を行う教員も出ています。防災まちづくり大賞授賞式では、本ゼミの学部３年生武田貫汰君が代表謝辞を述べました。「今回私達が受賞できたのは、先輩方が築き上げてきた大きな土台があったからです。チームつなくるを、先輩方から受け継いだ大切なバトンとして、今度は私達が後輩へと繋いでいきたいと考えています。（中略）将来、教師になります。教師になり、防災教育を通して、子ども達の防災意識を大きく変えることができると信じています。」先輩から後輩へ、この流れが続く限りチームつなくるは活動を続けるとともに、卒業生が学校の防災教育を担っていくことができる。私達はそう信じています。